

【民間支援者による意見交換】

社会とつながるために「本人に寄り添ったスモールステップによる支援とは」

進行役 NPO 法人リンケージ理事長 臨床心理士 石川京子氏

ゲスト NPO 法人ぐんま若者応援ネット

(アリスの広場) 理事長 佐藤真人氏

NPO 法人はじめの一步 代表 板垣弘美氏

一般社団法人ヤング・アシスト

支援コーディネーター 高橋奈鶴子氏

石川 社会的自立のステップは一通りではない。それぞれ若者が自分らしい生き方を模索している最中だと思います。すぐサポステにつながる、ハローワークに行く、就職するという若者ばかりではないかもしれません。

では、私たちはそういった若者を前にした時に、どうやって、この子たちと一緒につながっていけるか、社会につながっていく支援にはどのようなものがあるのか、それを探っていきたいと思います。

それぞれの地域で活躍されている3人の方から、それぞれの実践を通して、また事例を通して、皆さんと一緒にこのテーマについて考えていきたいと思います。

それでは、皆様、簡単に自己紹介をお願いします。

佐藤 アリスの広場で不登校やひきこもりの若者に居場所を提供しています。NPO法人ぐんま若者応援ネットの佐藤真人です。

アリスの広場というのは、不登校やひきこもりの若者が家から外へ一歩踏み出すことを目的とした、好きな時に訪れて、自由に過ごせる空間になっています。2014年から前橋市で開いています。

始めたきっかけは、私自身が中学1年生の時から不登校になって、それから6年間ひきこもりだったんです。その時にフリースペースにお世話になったことです。

このアリスの広場は、おしゃべりをしたり、仲良くなった人と遊んだりする子もいますが、皆とワイワイするのが苦手な人も当然いるので、そうした子は一人で本を読んでいたりと、或いは悩みを相談したりして、本当に自由な空間になっています。

そうした居場所提供だけでなく、文化体験活動として、御用伺いとか、今はコロナの関係で中止していますが、その他に1泊2日のアウトドアイベント、アリスの広場美術部というのも開催しています。アーツ前橋に出かけて2～3時間、自

分のペースで作品を見て回っています。アウトドアイベントでは10月に安中市にある学習の森に行ってきました。バーベキューをやったり、たき火をしたり、ピザを作ったりして、とても良かったと言ってもらいました。こうした活動を行っていますが、勿論、強制はしません、集団が苦手な子は、自分のペースでやっていいよと言っています。

その他に仕事体験もできます。ボランティアさんが開いているカフェだったり、農業体験だったりします。実際にカフェでの仕事体験をきっかけにしてアルバイトを始めたり、再就職に結びついた若者もいます。

アリスの広場に通うことで外に出ることに慣れて、そこで私だったり、スタッフだったり、通っている若者だったり、いろんな人と出会って話すことで視野を広げるきっかけにさせていただいています。

板垣 最初の一步代表の板垣です

私たちのNPO法人は、ひきこもりの本人とその家族の相談支援を行っています。親の会の方から始まっているので、親御さんからの相談を中心に受けて、そこから子どもさんにつながる支援を行っています。

今のところ対象年齢は20代以上ですね。学校を離れたお子さんとか、一度、社会経験を積んだのだけど、ちょっと上手くいかない事情があってという人たちが相談に見えたり、居場所として使ったりしています。

こういうことを始めるきっかけになったのは、私自身の子どもたちが不登校を経験して、その中でいろいろやってきた経験とか、そういう仲間と集うこととか、それぞれ励まし合うことだとか、そんなことが必要で大事だというふうに感じたので、仲間を募ってNPO法人として活動を始めました。

私の子どもたちは35歳と32歳になりますけど、その子たちが不登校の時には、不登校に対する進学先も見当たらない状態でした。そこで私の子どもたちは、高校中退とか長期不登校経験の子どもたちを全国から受け入れている、遠方の高校に進学しました。

その中で父母の交流とか、地域の人たちと寮での濃密な人間関係の中で育まれたものとか、経験が活かさないだろうか思い、こういう活動を始めました。先生とか、資格を持った方たちだけでなく、寮のおばちゃんとか、おじちゃんとか、人生の先輩として教えてくれたこと、そういうことができるんだなと思ったときに、私たちも何かできることがあるんじゃないかと思い、活動を始めました。

高橋 一般社団法人ヤング・アシストの支援コーディネーターを務めております高橋奈鶴子です。私たちの事業は、社会的養護自立支援事業ということで、約3年前になるんですけど、県から委託を受けて事業を行っています。

社会的養護経験者が対象になるのですが、例えば、里親さんであったり、児童養護施設等であったり、何らかの理由で親元から離れて生活をしなければならない状況になった子どもさんが、そこを退所した後に支援を行っていく事業所になります。

私たちは主に、生活であったりとか、就労の支援を行っているんですけど、対象となる若者は、親御さんを頼ることが難しい状況なので、生活と就労、別々の支援というよりは、同時に両方の支援を行っている状況もあります。

石川 第3部では、2本のテーマを設けさせていただきました。

一つは、社会につながるスモールステップ。これをどのように3人の方々が考え、支援をされているのか、事例を踏まえて、お話をいただきたいと思います。

もう一つの柱は、本人に寄り添う支援の必要性、それを具体的にどのように行っているのか。一番と二番と重複するところもあるかと思いますが、二番目は支援者として、どのようなことを大切にされているのか、こういったこともお聞きしたいなと思っております。

では、最初の社会につながるためのスモールステップ、これをどのように考えているのか、差し支えない範囲で、事例もお話しいただきながら、一緒に考えさせていただければと思います。

佐藤さんからお願いします。

<社会につながるためのスモールステップ>

佐藤 二人の支援例をお話ししたいと思います。

一人は、アリスに通って数年になる若者です。その子はいろんなアルバイトをしたり、行政の支援機関等に通っていたりしたのですが、なかなか続かない状況だったんですね。アリスに来始めたのですが、それもたまにとか、そういった利用の仕方でした。

久しぶりにアリスの広場に来た時に、自分にペースでできるアルバイトを見つけて、それを3ヶ月ほどやりきったと話してくれました。これまでのこともあってビックリしたのですが、その頃からアリスに来る頻度がすごく増えたりして、来なが

ら就職の支援機関に通い始めたと言うのです。

アリスの広場に来る若者のことを理解して支援してくれている会社の方から、単発のアルバイトを利用者に呼びかけてもらえないかと連絡があったので呼びかけたところ、彼も参加してくれて、今では周りが驚くほど活発に就職活動に取り組んでいます。

もう一人の子は社会経験のある方で、これまでにいろいろな業種に正社員で入っています。職場の人間関係が上手くいかないことが続いてしまって、仕事が長く続かないということで、アリスの広場に来てくれました。

これまで正社員で採用されたということは能力は高いと感じられたので、ボランティアスタッフとも話して、何か自信を取り戻して行くことで、また動き始めることが出来るのではないかと考えていました。

あるとき、支援者の方がやっているカフェで仕事体験をやってみたいかという話がありました。職場は安中市にあって結構遠いのですが、その若者は車を持っていたので車で行き始めたんですね。最初のうちは結構緊張していて時間も短かったのですが、慣れていくのにつれて少しずつお手伝いの時間も増えていって、回数も週1回から数回と日数もだんだんと増えていったそうです。それから3～4ヶ月経って、急に就職活動を始めて再就職につながったそうです。

就職活動を始めるまで時間がかかっているのですが、仕事が始まる直前まで、忙しい中、わざわざ遠くまで来てくれて、アルバイトで手伝ってくれたと支援者の方が話してくれました。

はじめは、周りから見ると自信を無くしてしまっていたり、出てくるのがやっという感じの方もいたり、続かない感じの方もいるのですが、何かちょっとしたきっかけがあれば急に動き出す方も結構いるんですね。

石川 先ほどの唐沢さんの話にもありましたが、ステップを踏んでいくというというのは大事なこともかもしれませんね。

では、続きまして板垣さんお願いします。

板垣 私の方では親御さんから相談を受けることが多いですね。

その中で、小学校の頃からずっと不登校だったお子さんが、20代になりましてということでお話を伺いました。

本当に外出するのは通院で月に1度ぐらいでした。その後、親同士の付き合いの

話の中で少しずつ聞いていくと、家庭菜園の手伝いをしているとのことで、家庭で部屋に閉じこもっているだけではないことがわかってきました。お母さんが子どもさんへの働きかけとか言葉かけで、随分と勉強をされて、気を遣ったポジティブな言葉に変えて話しているなと思いました。

私たちは内職をお出しすることがあります。それも毎回ではないのですが、私たちの繋がりの中で年に一度ぐらい仕事をくださる所があったので、その子に内職をお願いすることにしました。外に出なくても家の中でできることなので、それもとて簡単なことだったので始めてもらいました。

持ち帰ってみて、本人が「やりたくない。」と言えば、やらなくてもいいとお伝えしたら、丁寧にやってくださって、それがきっかけで私たちとの関係が始まりました。その内職の仕事をお渡しした時に、何回かお母さんが持って帰って届けてくれたのですが、ある日、持って行くんだったら私も行ってみたいと言われたそうなんです。

一緒に出かけて来てくれました。そこで初めてお会いして、いろいろな関係が始まったんです。最初は本人と話すことはほとんどなくて、お母さんと話す形だったのですが、何回か繰り返しているうちに、少しずつ彼女の出来ることを私たちが企画して、例えばケーキづくりをやりましょうかとか、お菓子作りが得意な子だったので、クッキーづくりをやりましょうかとか、お誘いしていました。

でも、何分にも家から出ることに慣れていなかったものですから、そういう人たちは、いざ家を出る日になるまでに、夜寝られないとか、いろんなことが起こってくるんです。本当にそういうことがあるんだなと思いつつながら、結局、講座に出られぬままということもあったのですが、私たちは時々お誘いしていました。

なかなか出てくるタイミングは難しいなと感じたものから、私たちの学習会の時に、クッキーを焼いて届けてくだされば、皆さんに配りますよというような形で、少し社会参加というか、社会とのつながりが持てるような取組をしてきました。

やっぱり家から出るということに、皆さんすごく時間がかかるんです。例えば、午後1時に約束しても、朝早くから準備をしていたりとか、夜は眠れなかったりとか、そういう方が多いんだなということに気がつきました。私たちもいろんな講座をやったりするのですが、最初はパソコン教室なんかも、4時からにしましょうかと、そういう形で無理のないところから始めました。

約束していた時間に来られないという、マイナスな経験はできるだけ避けたいなと思って、そういう形にしました。それでもやっぱり間に合わないということも起

きるんですけど、「それでも大丈夫だよ、来てくれたことはすごいね。」と、私たちは彼女を迎え入れてきました。

やっぱり似たようなお子さんが入ってきて、「今日は休みます。」というのを繰り返していました。そうして、私たちの所へ出て来るとか、そこで出会った人と関係を持つとか、サポステさんにつながるといったことがあります。

それぞれに本当に小さなステップというか、なかなか難しいのですが、最初は本当に小さな、小さなステップだと思うのですね。家を出るまでにすごいストレスと緊張感が大きいのだなということに気づかせてもらって、私たちもそれを支えながら支援をしています。

石川 板垣さんありがとうございました。

それでは高橋さんお願いします。

高橋 私たちの事業に相談される方は、本人は勿論ですが、里親さんであったり、出身の施設の職員さんであるとか、実際に利用の対象になる方が勤めた企業さんから相談をいただくことがあります。

その中で一つ事例を挙げさせていただきます。私たちの事業所につながったのは、県の方でこれからも支援を継続していきますと書類上で知った方ですが、施設を退所して4月から就職されました。

そして、数ヶ月後に少しずつ欠勤が続いてきたと、里親さんからご連絡をいただいたので、本人に会う機会を設定しました。いろいろなお話をして様子をみましょうと時間も経っていきました。

でも、やはり少しずつ欠勤が長期化してきて、家の方でも部屋に引きこもるようになり、里親とのコミュニケーションが減ってきたということで相談をいただきました。

その時にまず感じたのが、連絡をしてくださった里親さんがものすごく不安になっている状況だったのですね。なので、まずは、本人を取り巻く周りの方々の不安を聞くということもすごく大事にしています。

そして、本人はやはり、もう完全に職場に行けないという状況にもなってきて、私たちも定期的に本人のところに出向いて、面談を繰り返していきました。

ただ本人の状況が、実際どんな状況なのか、周りが抱えている不安とか、考えとかを、どんな風を感じているのか、周りが困っているけど本人は困っているのかど

うか、そこを把握する必要があると思って、まずは本人に会う回数を増やしていき
ました。

そして本人とは仕事の話はしないで、取りあえず、私と貴方との信頼関係を築き
たいという気持ちをよくわかって欲しいなと思ったので、本人が何が好きなのか、
どんなことが嫌だったのかを聞きました。

私たちの所に相談にくる方々は、ほとんど過去に虐待を経験している方が多いの
で、もしかしたら今までは特に症状として出てきていなかったものが、年齢が上がる
ことで出てくる可能性があることも踏まえた上で、面談であったりとか、本人の中
で思い浮かべるものが何なのかを確認しながら進めてきました。

その中でやはり今までわからなかった、いろんな本人の抱える苦しみだったりとか、
発達特性だったりとか、精神面のバランスの偏りも見えてきたので医療に同行して
いたりとか、発達支援センターの方に連絡を取らせていただいたりとか、勤めていた
企業にも連絡を取って、実際、職場では、本人がどんな状況だったのかを確認をさ
せていただきました。

今では手帳も取れて、本人にとってどんな職場が合っているのか、精神的に悩み
もあるので、それも大丈夫だよ、見放したりはしないよと繰り返して伝えていって、
今はまた、新しい本人に適した、本人の能力を発揮できる場所を提供できるように、
就労先と一緒に探しています。

石川 高橋さんありがとうございました。

ここまで事例を報告していただいたので、ここからは少し、それぞれの支援者の
方々が、本人に寄り添うと考えたときに、どんなことを大事にされているのか、こ
のあたりをお聞きしたいと思います。

加えて、長く続けてこられた中で、皆様の中にも、その支援というものの移り変
わりがあったようにも思います。是非、その辺りも含めてお話ししていただきたい
と思います。では佐藤さん、よろしく申し上げます。

<本人に寄り添うときに大事にしていること>

佐藤 私自身、10代で不登校の経験があって、20代の終わりでもまた失敗している
んですね。そういうこともあるので自分の話を重ねて話していきたいと思います。

まず、働くということ、社会って怖いという感覚が、ずっと小さい頃からあった
んです。それを自覚し始めたのが小学校の高学年、何となくぼんやりとそういう気

持ちがありました。今から思うと、それが長期間の不登校になった原因の大元、それがわかったのが20代の後半でした。

社会に出て働くとなるとやっぱり怖いというイメージを持つ子が多い。私の場合も、何が怖いかというと、怒らせるとか、怒られるんじゃないかとか、あと学生時代に比べて休みが少なくなりますよ、大人になって社会に出て働くということは、そういう大変なことばかり増えるという感覚が小学校時代からあったんですね。

その感覚というのはその子によって違うのだけど、社会に出て働くということはすごくハードルが高いんですね。だから初めのうちは、そうした若者の特性を理解してる方のもとで仕事体験ができることが大事なんじゃないかと思っています。

やはり理想はですね、ドタキャンOKですね。やはり仕事体験とは言っても、前日とか前々日あたりから緊張し始めてしまうんですね。当日になってお腹が痛い、頭が痛いとか、行けなくなることが当然ある訳で、そのことでまた、自分を追い込んでしまうんですね。

ですから、ドタキャンOKという言葉があると、気分が楽になるし不安も和らぐんですね。最初のうちは、そうした理解のある方のもとで仕事体験ができるといいかなと思います。

私の場合は20代の終わりにもまたつまずいて、フリースペースにお世話になったのですが、仕事を辞めた理由というのは、会社全体の社風もあって、単純に上司がどなり散らすタイプで、私は心も弱かったので、半年で辞めてしまったんです。

東京から戻って来て、どうしようかな、さすがにもう終わりかなと思っていたのですが、十代の時にお世話になっていたフリースペースのパスの会代表の山口さんから、たまたま手紙が届いたんです。明るい感じの方だったので、仕事を辞めてしまった話を聞いてもらいました。

私自身、ショックがあったんです。自分なりに、大学に行けるようになって、大学院まで進んで、社会人になってそのままいけると思っていたのですが、案の定やっぱり避けていた壁がドーンと出てきて、働くことが怖いという思いもあって、フリースペースに通うようになりました。

十代の時と違っていたのは、社会に出て働くことが怖いと自覚していたので、仕事体験から始めました。アルバイトが厳しかったので、ちょっとした内職で、おばちゃんたちとワイワイ言いながらやって、少し自信も付いてきたんです。金額にすると微々たるものですが、金額の問題ではなくて、自分でも取りあえず仕事というものが出来たんで、自信も出てきたんですね。

その時に思ったのが、パスの会といった居場所に行って、目的はなくて、おしゃべりとか、ボランティアの方に声をかけていただいたりしながら、サポステにつながっていったんですね。

そしてアリスの広場を始めたのですが、そこがいろいろな人間関係、ボランティアさん、親御さんも含めて、いろんな人たちの広がりになればと思っています。

それを通して、私自身気がつかなかったような場所に若者がボランティアさんに連れて行ってもらって、本人が変わっていったという事例がいくつもあります。ですから人間関係が大事だなと思っています。

石川 つい聞き入ってしまいました。次は板垣さんお願いします。

板垣 私たちの所では、最初に、自分で嫌だったら断れるとか、自分の意思を尊重しますよということを伝えています。いくらお母さんが連れてきても、自分にやる気がなければ断ってもいいんだよということを最初に伝えると、意外にスンナリと気がしています。

出来れば、お母さんの意見ではなくて、自分が行くと決めることも大切にしたいなと思っているので、自分で行きたくなければ「今日は休みます。」と、連絡をくれればいと話しています。どうしてもお母さんは、外に出したいから、今日は休むなんてというような後押しをしてしまうんですね。自分が行きたくなければ休みますと連絡すれば大丈夫だよ、それが認められる安心な場所だよと伝えています。

私たちの場所は、いろんな人たちが出入りするんですね。ひきこもりだけだとか不登校の子だけが集まる場所ではなくて、さすがに地域の方が自由に出入りすることはないのですが、お店のオーナーが奥でゴルフの室内レッスンをしているので、そのお客さんがたまに来たりしています。それなので、パソコン教室をやりながら、奥でゴルフのレッスンをやっているということもあるんですね。

そういう風に、少しずつ社会の人たちに関わることをやっています。深く関わることはないのですが、「こんにちは」とか、挨拶程度なんですけど、顔が段々とわかってくるなど、少し自分も社会に関わっていると思える、それぞれ人の顔がわかっていくという、つながりが広がっていくことが大事かなと思っています。

すごく外の人に対して、怖いという恐怖を持っていたりするんですね。私のことをどう見ているんだろうかと、そんなことばかり考えているんですね。ですから、自然な形で人と関わることをやっています。

そして、ボランティアの方が、そこから先、仕事につなげるということをやってくれています。会社を紹介してくれたり、こういう仕事ができるんじゃないのと仕事を作ってくれたりしています。その中でやっていけそうなことを少しずつ広げていけたらなと思っています。

私たち支援する方も、これが失敗したからといって落ち込むのではなくて、じゃあ次の方法があるかもしれないと、ポジティブに考えていくようにしています。先日夏祭りでやっているような焼きまんじゅうのお店をやってみて、外の人には売れないので、知り合いに頼んで少しずつ買いに来てもらったんですね。

そんなことをやりながら会話を増やしていくとか、自分たちに出来ることを増やしていくとか、その中で少しでも利益が出たら、私たちはその子たちに渡してあげたいと思っています。お金を手にすることは、わずかでも本当に力になっていくんですね。庭掃除の手伝いに行き、少しでもお金をいただくようにしています。だから、全くのボランティアで無料奉仕ではない形を、なるべく私たちが作ってあげていながら、社会とのつながりを作っていきたいと思っています。

石川 ありがとうございます。高橋さんお願いします。

高橋 私たちは、本人がどう感じているか、本人がどうしたいと思っているのかを面談をとおして確認することを大事にしています。

周りの方々の思いだったり、勿論聞き取りはするのですが、まずは本人がどうかということを大事にしています。その中で専門の機関であったり、何かサービスが必要であればそちらにつなぐお手伝いをしています。私たちだけで抱え込まない、それを大事にしていきたいなと思いつつ支援を行っています。

支援者として気をつけたいのは、支援者の価値観、私たちの価値観を押しつけていないか、それが絶対ではないので、そこに偏って誘導するような形で、社会で働くとか、生活するとかを押しつけていないか。

支援者が正しいと思っていることが必ずしも正しいとは限らないので、常に自分の考えとか感情から少し離れた視点でも見られるように、自分自身をチェックしながら支援していきたいなと思っています。

もう一つは、周りの方々も安心してもらえるようにすることも大事だなと思っています。というのは、周りが焦っていると、本人に対してもやっぱり圧迫感を与えるようなアドバイスであったりとか、早く、早くじゃないけど、どうしてとか、そ

うということが本人を萎縮させてしまって、仕事にもつながらなかったり、ひきこもってしまったりするので、本人だけでなく、周りの方々にも安心してもらえるような、例えば、本人にこういう声かけをしてあげれば安心しますよとか、アドバイスをしています。

実際に就労したら、就労先に訪問をして、私たちの方から企業さんからお話を聞いたりとか、本人からも話を聞いたりとか、フォローをしています。

石川 高橋さんありがとうございました。

もう少し話を進めていきたいなと思います。ここはもう少し話したかったとか、伝えたかったなということがあればお話してください。

佐藤 子どもにとって社会で働くということは大変なハードルなので、壁と言ったほうがいいかな、スモールステップという話にもあるように、本当に少しずつ、自信を持てるように進んでいくことが大事かなと思っています。

そこに私たち支援者、それぞれいろいろな団体があるので、それぞれ得意なことを活かしながら、若者に寄り添っていくことが大事かなと思っています。

板垣 私たちの支援の対象者の年齢が比較的高めなので、お母さんたちも年齢が高めなんです。ですから、社会に出て働かなければいけないという価値観の中で育ってきている方がたくさんいらして、弱音を吐いてはいけないとかいうところもあって、そういう部分では少し無理しすぎかなとか、相談する機会がなかったとかあります。

私には35歳の娘がいますが、その頃は不登校の相談するところがなかったんです。そういうことを経験しないまま社会に出てしまった方にとっては、人に相談するということがないんですね。選択肢にないんですね。

誰かに相談することがすごく大事だということは、私たちは感じているけれども、それを経験していない人たちは相談していないみたいなんです。今の若い人たちはスクールカウンセラーが学校にいるのが当たり前ですが、小さい頃からいろいろなことを相談しながら、学校だけではなくて、違う所にも相談してもいいような、そういう機会を持ち続けて欲しいなと思っています。だから一人で抱え込まない、家庭で抱え込まないということを伝えていきたいなと思っています。

あと、自己肯定感ということが話題にあがってきますが、私たちの中では、出来ることに焦点を当てたら、自己肯定感ではなくて、マイナス部分を含めた、こんな

形があって、私のままでやっていいのかなという、自己を認める肯定感、そういったものを広めていかなくちやいけないなと感じています。

高橋 大事にしたいなと思うのは、自分たちの従来の働き方というイメージは、時代が変わることで、いろいろな働き方があると思うので、それがかえって都合良く、働きやすくなる若者もたくさんいるのではないかなと思うんですね。

支援者側も、新しい社会の働き方であったり、文化ですよ、例えば IT などの情報もいろいろと利用しやすくなっているので、そうしたことにも電波を張って、これから働こうとしている人たちに、どんな形が合うのか、本人たちにどんなペースでつなげていったらいいのか、そこを気をつけながら支援していきたいなと思っています。

<新しい相談のあり方>

石川 私たちこの一年で、コロナ禍の中、いろんな生活の制約の中で、違った生き方という考えも出てきた印象があるかもしれません。

この一年でテレワークの募集が増えたなという印象があって、私は障害者の就労支援をしているのですが、これまで県内ではテレワークの募集はほとんどなかったのですが一気に増えたなと思っています。

本人たちが生きにくさを感じているのは、本人たちの理由ではなくて、社会が期待していることとの、もしかしたらズレなのかもしれない。新しい環境が、もしかしたら違う生き方を提案してくれるかもしれない。

今日の話の中で、相談とか、対話とか、話し合う、面接といった言葉が比較的たくさん出てきたかと思います。

一方で最初の鈴木先生のお話にもあったように、言語化する、言葉にすることに苦手さを持っている方もいるかと思います。それは特性上だったり、或いはこれまでの経験の不足であるのかもしれません。

その新しい相談のあり方として、話し合うこと以外に相談と同じような価値を生むもの、何か支援というものは考えられることがあるのでしょうか。何か思うところがあればヒントをいただきたいと思います。どなたからでもいいです。

板垣 言語化する難しさみたいなどころがありますね。私たちの所も、特に相談という形で関わっている訳ではないので、ただ何となく来てみたという方もいらっしゃる。

そういう時には、一緒に何か作業をするとか、お手伝いをさせていただくとかという形で、一緒に時間を使う作業をするとか、共に何か作り上げるということを、重ねていくことが大事な。根掘り葉掘り聞くわけにもいかないの、そういうことをしているうちに少しずつぼそっと言ってくれたり、そういうことが大切なのかなと思っています。

佐藤 不登校の子だとかひきこもりの若者は、慣れてくれば自分から話してくれる子も勿論いるのですが、最初のうちはなかなかしゃべるのが苦手、みんなと一緒にいるのが苦手で、慣れてきても、直接ワイワイするのが苦手な子もいます。

自分から積極的に話す理由はなくても、アリスの広場に来て、みんなと話すことはなくても、その空間にいたい、近すぎず遠すぎずの場に家族以外の人何人かいること。自分から言葉を発することはなくても、その場を横目で見ながら過ごしている。自分から発信するのが嫌だという子もいます。

逆に、自分から話せる若者はすでに1段ステップを上がっていると言えます。こうした若者はたとえ近くにスタッフがいなくても周りの子とコミュニケーションをとっています。

自分の思いを伝えるのが苦手な若者には、話しやすい雰囲気づくりはもちろんですが、表情や声のトーン、しぐさなど、言葉として発せられるもの以外からも気持ちを読み取っていく必要があると思います。

高橋 言語化が苦手な子の場合は、しばらく一緒にいて、目が合えばお茶をすすって、同じ空間にいて、貴方は言葉を発しなくてもいいんだよというメッセージを繰り返して伝えていくことが大事だなと思います。

単発ではなくて、何度も繰り返して、この状態が今の貴方だけど、それも大丈夫だよというのを伝えていくこと。言葉でない伝え方になると思うんですけど、それもすごく大事だなと思っています。

石川 相談というのも、もしかしたらステップとしては、ものすごく大きなステップなのかもしれないということを、3人の話を聞きながら感じたところです。

最後に、ご自身が大事にされていること、今まで出会った若者たちの声を伝えていただいても結構です、既にお話ししていただいたことでも結構です。皆さんにメッセージとしてお話いただければと思います。

佐藤 これは本当にシンプルな言葉で、私がお世話になったパスの会の代表の方が言っていたことなのですが、「不登校になっても、人生終わりじゃないよ」と当時言われて、それが一番、いまだに強く残っていますね。私自身、不登校になって、ひきこもりになって、会社勤めができたことで実証されています。

一般的には、いい大学に行って、いい会社に入ると言われますが、皆がそこに乗れるわけではないので、そうした場合に学校を辞めてしまって、私の場合は高卒認定をとって大学に進学したけど、生き方はいろいろある。到達点が会社に勤めるという一つではないと思います。

どういう生き方をしたいかであって、収入とかの面だけでみるのではなくて、自分のできる範囲でやっていく、それで自立ができればいいんじゃないのかなと言っています。

板垣 本人にも、家族にも、支援者の方にも、最後まで諦めないでいてもらいたいなと思っています。

時が経つに従って社会も変わっていきますし、コロナのような思ってもいなかった事態も起きたりしますが、決して諦めないでいて欲しいな、これが駄目だったとしても、こっちがあるかもしれないし、また時間が経てば違うものが出てくるかもしれない。

私たちも今回、いろいろな支援者の話を聞いて、こういう支援があったんだと初めて知ったりすることもあったし、どんどん新しい支援機関も出てきていますしね。そういうことで諦めないでいただきたいなと思っています。そして、私たちのような小さな場所もたくさん増えていて欲しいなと思っています。

高橋 支援者が孤立しないということが大事だなと思っています。ついつい抱え込みがちになるのですが、支援者もいろいろな人に頼って、貴方のことを応援しているんだよということを本人に伝えてもいいのかなと思っています。

それが結果的に、本人を応援している人がたくさんいるんだよというメッセージになると思うので、できる限り味方をたくさん作って、支援者が互いに協力し合っ
て当事者をサポートできることが大事かなと思っています。

石川 そろそろお時間がきたようです。

今日は三部構成で、皆さんと一緒に考える機会を持たせていただきました。

第1部では、不安といったものが一体どんなものなのか。若者はどんな不安を持っているのか、どんなふうに私たちは彼らに関わっていけるのか、それを2人の先生からお話ししていただきました。

第2部では、学校や就労支援の具体的な支援や指導の方法、私も知らなかったこともたくさんありました。ご説明をいただいたと思います。中でも、やっぱりステップをきちんと積んでいく、本人が自分を作っていくことの大切さを伝えられたかと思います。

最後は、地域で活躍されている方々に具体的な実践の例をお話ししていただきました。それぞれ皆様、どのような言葉が心に残っているのでしょうか。

若者たちはもう既にたくさん自分を見つめています。こうなったらどうしよう、あんならどうしよう、常に向けられているのは自分です。ずっと自分のことを考えていて、ハッピーなこと、ポジティブなことが、果たして出てくるだろうか。是非、若者たちが、自分たちのことだけでなく、周囲のもっと素敵なこと、安心できることに目を向けていただく、そんな支援をしていきたいなと感じました。

今日、たくさんの方にお話をお聞きしましたが、多くの方に共通していることがいくつかあるなと感じました。

一つは、ご本人が、そのご本人の人生の主演であると、本当に心から思っていること。おそらく支援者、一人ひとり、その人なりの価値観があります。でも、その価値観を押しつけることでは何も前に進まないということを経験を通して、よく知っていらっしゃる方が多かったように思います。ですから、多くの方が、ご本人の意思、考え、納得を大事にしていたと思います。

もう一つ感じたのは、皆さん、ストライクゾーンが広いなということでした。何々しなければいけないという風に、ストライクゾーンが狭くなってくると、我々自身、支援者も窮屈になっていく、そればかりか、目の前にいるかわいい子ども、若者も窮屈になっていくかもしれない。

でも、それでOKよ、何々してもいいよと、言葉をちょっと変えるだけで、本人たちの緊張はフツと拭えるかもしれない。多分、フツと拭えたときに、次の一步を踏み出すのかもしれない。そんな風を感じた時間でした。

今日は会場の皆様にお会いすることができませんでしたが、皆様がお感じになったことを、どこかでお聞きできればと思っております。長い時間でしたが先生方ありがとうございました。